

## 土生の庚申塔（土生地区）

先月号に引き続き、土生地区の文化財をご紹介します。  
土生の庚申塔は、土生公民館前の道路から南西方向に細い方の道を200mほど進んだ道沿いにあります。

庚申塔とは、60日に1回巡ってくる庚申の日に寝ると、体内から「三尸」と呼ばれる虫が抜け出して、その人の寿命を縮めようとするため、その日は寝ないで起きていなければならないという信仰に基づき、供養塔のことで、江戸時代を中心に数多く建立されました。その中でも、青面金剛は、三尸駆除のご利益があることから庚申信仰の本尊として祀られてきました。



土生の庚申塔は、台座を含めた高さが128cmあります。正面には「南無青面金剛」という文字があり、その上部には左右1つずつの円が刻まれています。この2つの円は「日輪」と「月輪」と呼ばれ、夜の月から朝の太陽にかわる様子を表したものと考えられます。  
有田川町内に残る庚申塔は、一石で作られて屋根のないものが大半ですが、土生の庚申塔には屋根があり、本体と屋根が別々で作られて組み合わさっています。屋根は軒の反りを表現して丸みを持たせており、懸魚と呼ばれる屋根飾りを表現するなど、意匠がこらされた立派なものです。

側面には元禄15年11月13日と刻まれており、1702年に建てられたものであることが分かります。町内に残る庚申塔の中では、下津野の高瀬の庚申塔（1692年）に次いで古い時代のもので、このことから、庚申塔を建てて供養するというのが風習は、330年前ごろに高瀬地区や土生地区から周辺地域に広まっていったと考えられます。



屋根と日輪・月輪